

素粒 富山県

素粒の来し方行く末

私にとって『素粒』について語るという事は、この二人について語るということと同義だ。ひとりには兼久文治。もうひとりは大黒恵子。二人ともとうに鬼籍の人だが、どれほどの年月を経ようとも、『素粒』においてその存在が薄らぐことはない。

兼久文治は一九二五（大正一四）年生まれ。没年は二〇〇二年すなわち二〇年前になる。兼久文治に創作を教わっていた八名が作ったのが『素粒』、という繋がりである。兼久文治の勉強会は、はじめはカルチャー教室的なものだったが、じきに枝分かれした。教養を目指すのではなく、文学を目指したいというその分派には、創作の前では誰もが平等、対等、というびりつとした空気があって、五年遅参した筆者にも心地よかった。兼久文治は弟子が書いてきたものに対して基本的にけなすということをしなかった。ほめる際には具体的に過不足なくほめた。ほめられた当人は師の期待がひしひしと伝わり、理解されていると思えた。そのあんばいが絶妙であった。兼久文治は富山



1994年の兼久文治、大黒恵子、筆者がいる勉強会のスナップ

兼久文治の薫陶

北日本文学賞の由来

素粒



2022年現在の素粒の会合。男性同人一名が来る予定だったが、仕事の都合で来られなくなった。いまはほぼその4名での活動

県内の地方紙北日本新聞（県内購読シェア約六割）の朝刊コラム「天地人」を二二年間七〇〇〇編超執筆した人であり、筆者は結婚で富山に来て、この地方新聞、コラムだけ全国レベルだ、と感じ入っていたところ、奇遇にもその執筆者の勉強会に巡り会ったのである。

兼久文治は富山県内のアマチュア小説書きを底上げしていった人で、富山県の地方紙北日本新聞の文化部長になったのが昭和四〇年。翌四一年に兼久文治は（世間的には北日本新聞社は）「北日本文学賞」を創設する。三〇枚の短編小説の全国公募文学賞だ。おそらく地方文学賞の魁さきがけではないか。選者に丹羽文雄（1〜2回）、井上靖（3〜24回）というビッグネームを招聘する（25回から現在までは宮本輝）。その経緯は芥川賞作家の津村節子のエッセイ「蘇る思い出」（『とやま文学』28号、特集「兼久文治・松原敏の時代」）に詳しい。津村節子の夫は周知の通り『高熱隧道』の吉村昭。兼久文治は夫妻に相談したうえで中央文壇の重鎮丹羽文雄に選者を依頼し、二回目までならという条件で了承を取り付け、夫妻も驚いたというのだ。だが勉強会でそのような手柄話などはしなかった。

昭和六三年に兼久文治は北日本新聞社高岡支社にて創作の教室を始める。そこに生徒として参加していたのが大黒恵子だ。彼女がいかに兼久文治に薫陶を受けたかは、平成五年からともに学んだ私自身がこの目で見ているが、前出

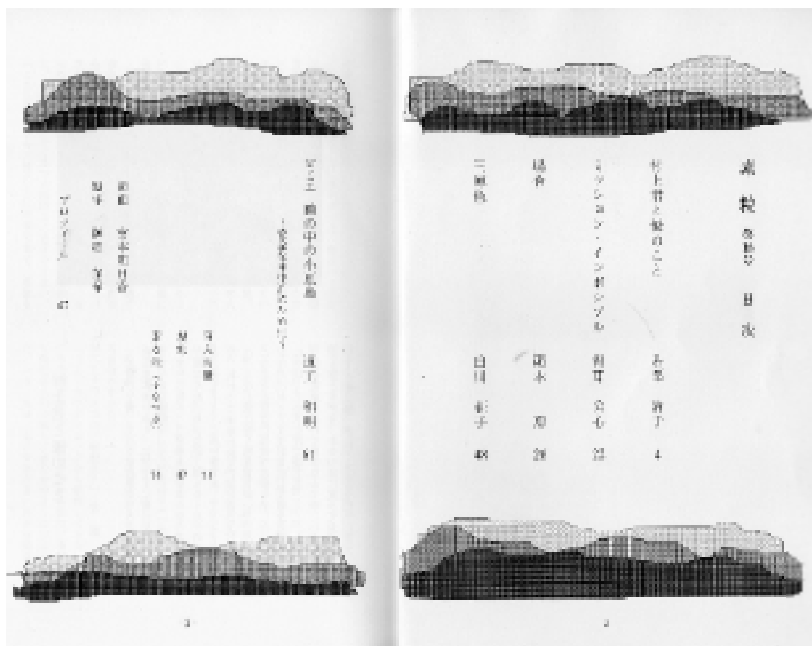


の「とやま文学」二八号にも弟子の代表といった体で「かの地での先生に、「生徒から」というエッセイを寄せていて、「書く、ということとはこういうことなのかと、慄然とした記憶があります。世界が変わる思いでした」と述べている。こういう感受性の人だから、当然弟子仲間の精神的支柱であった。筆者が大黒恵子のいる月一の勉強会に参加して六七年も経ったころか、兼久文治はさかんに同人誌を作れと言うようになった。だが「私たちは誰一人まともに受け止めようとはしませんでした。精神の有りようも含め、簡単には手の付けられない、大変なことのように思っていたのです」（『とやま文学』三一号 特集富山の同人誌Ⅰ 大黒恵子「『素粒』過ぎ去った十年と、これから」と）。そんなわけで弟子たちが何の行動も移さないでいるうちに師は病に斃れ亡き人となった。「葬儀のあと、言い合させたように生徒、数名が集まり、お茶を飲みながらの想い出話の最中、ふいと思いつき、どうします、同人誌、やりますか、と問い掛けました。その場にいた全員が、即座に、やりましょう、そう答えました」（同）。私もその場にいた一人だった。こうして、二〇〇二年に師を喪って、二〇〇三年に八名の弟子で同人誌を作った。『素粒』という名は大黒恵子が提案し、即決だった。兼久文治がないという事実の中で、勉強会が存在するわけがない。このままこの会が散会、雲散霧消するのは耐え難い、いや、もっ

たいない、教わったことも、人のつながりも。同人誌創刊しか選択肢はなかったのだ。同人の中心はむろん大黒恵子であったが、彼女はかたくなに主宰という名称を拒んだ。せて代表とは名乗ってくれと頼んだ。年に一号発行するために、何ヶ月かに一度集い、草稿を批評しあった。師がない。教わったことを思い返しては、先生はこう言われたよね、というふうに励まし合った。子曰くとはこういうことかと論語が身近に思えた。その後同人は増えたり減ったり、長くやっていけば誤解も齟齬も往も来もあった。二〇一四年四月、『素粒』は大黒恵子を病により喪った。大黒恵子が『素粒』のために書いた作品は第一号の五枚の短編で最後となった。

正直なところ、大黒恵子の死で『素粒』は終わったなと思った。孤児のような気分だった。その気分は今も続いている。『素粒』が継続しているのはなぜだろうと考える。創刊時から事務局を請け負っている流れで、原稿が集まれば発行にたどりつく。原稿が集まるのは締め切りを設定するからである。締め切りを設定するのは、大黒恵子が締め切りを設定していたからである。ということは、冒頭に書いた、記憶が薄れ、締め切りのことを誰も言い出さなくなつたとき、『素粒』はその役目を終えるのだろう。とりあえずは片手ほどに残った同人の誰かしらが、締め切りのことを切り出すのである。

（文責 白川莊子）



「素粒」事務局 〒939・8055
富山県富山市下堀八・一七
道正央子方
TEL076・423・7507